

白さび病 Rust (*Puccinia horiana*)



葉表の病徴

葉裏の病徴

【見分け方（被害と診断）】

一般に親株由来の感染であるため、施設育苗時に発病し、定植後の低温、多湿で多発する。葉の裏面に直径約1mmの乳白色で隆起した斑点が現れる。やがてこの斑点は孢子堆と呼ばれる2～3mmのいぼ状となる。病徴がすすむと葉全体に斑点が形成され、やがて葉は枯死する。本病の識別は葉裏で容易にできる。

【発生生態】

主な伝染源は苗からの持ち込みと考えられ、露地での多発時期は6～7月である。定植後、気温がやや低く（20℃前後）、葉の表面が水で薄く濡れて湿度90%以上の湿潤状態（結露時）が感染条件となる。本病の冬孢子は発芽小生子をつくり、小生子の飛散により風媒伝染する。飛散範囲は約300mであるが、ほ場内では無風状態でも伝染する。小生子は葉に付着すると、2～3時間で発芽・侵入し、10日前後で白斑が生じ、やがて孢子堆となる。冬孢子は低温条件下で寿命が長く、枯れた病葉上でも越冬する。